

平成28年度第1回伊勢原市総合教育会議議事録

平成28年7月6日（水）午後3時30分から伊勢原市総合教育会議を子ども科学館会議室に招集した。

[事務局] 教育総務課

[開催日時] 平成28年7月6日（水）

午後3時30分から午後4時56分まで

[開催場所] 伊勢原市立子ども科学館 会議室

[出席者] 市長 高山 松太郎
委員長 渡辺 正美
委員（委員長職務代理者）永井 武義
委員 重田 恵美子
委員 菅原 順子
委員（教育長） 鈴木 教之

[事務局] 谷亀教育部長、大高学校教育担当部長、
山口歴史文化推進担当部長、古清水教育総務課長、
守屋学校教育課長、石渡指導室長、小谷社会教育課長、
立花文化財課長、小巻スポーツ課長、本多教育センター所長、
麻生図書館・子ども科学館館長、
瀬尾係長、渡邊主事（以上、教育総務課）

[公開の可否] 公開

[傍聴者] 20人

[経過] 次のとおり

1 開 会

【谷亀教育部長】

定刻になりましたので、ただいまから平成28年度第1回伊勢原市総合教育会議を開催いたします

開催に先立ちまして、傍聴人の皆様に申し上げます。本日、受付で資料と一緒に
お渡しいたしました注意事項を御確認の上、傍聴をお願いいたします。

それでは次第に従いまして進めてまいります。

初めに高山市長からご挨拶をいただきます。

2 あいさつ

【高山市長】

皆さん、こんにちは。大変お忙しい中、お集まりをいただきまして、心からお
礼を申し上げます。また、日ごろから教育行政に対しまして大変御尽力をいた
だき、心から感謝を申し上げます。

この総合教育会議ですが、制度が始まって間もないわけでもありません。昨年度は2回の会議を開催させていただきました。その会議を通じまして、教育に対する私と委員の皆様方の思いといいますか、感じておられることは大体同じなのかなという、そんな印象を抱いております。今後もより一層、民意を反映した教育行政の推進を図ることを目的としておりますので、引き続き委員の皆様方と連携を密にしながら取り組んでまいりたいと思っておりますので、よろしくお願い申し上げます。

さて、教育に対する課題も多々ございますが、いいニュースも入ってきております。既に御案内のとおりですが、伊勢原市が今年4月25日に日本遺産に認定をされました。7月1日に岐阜市において認定証の交付式が行われました。菅原委員にも来ていただきまして、本当にありがとうございました。

日本遺産に認定されたことは、伊勢原市にとりましては非常に大きなことだと改めて感じたところでもあります。昨年度の認定が19カ所、本年度が18カ所ということで、会場には37箇所のブースが開設されました。伊勢原からも市民の方が大勢行っていただき、大変盛り上げていただきました。1番活気があったブースが伊勢原であったと感じております。

審査員の先生ともお話をさせていただき、その際にどこが伊勢原の1番のポイントであったかを尋ねました。今、私の手元にある教育委員会で発行しているこの「きょういく伊勢原」に伊勢原の日本遺産のストーリー概要が掲載され、過去の歴史やその経緯が書かれています。また、国へ出した申請書類には、それらの遺産を今後どう活用して地域の活性化につなげていくかといったことが最も分かりやすく記載され、実際に現地に行かなくても内容が理解できたという評価をいただきました。担当職員は大変苦労も多かったと思いますが、教育委員の皆様方をはじめ、関係者の皆様方の御協力に対し改めて心から感謝を申し上げる次第でございます。

以前から申しておりますが、日本遺産は認定されたことで終わりではなく、ここからが出発であり、これをどう国内外の多くの方々にPRし、地域の活性化に結びつけていくかが大きな課題でございますので、今後も皆様方のお力添えをいただきながら進めてまいりたいと思っております。また、これを学校や家庭、地域でどう活用していくかということも課題の一つであろうと思っております。是非、子どもたちがこの伊勢原市に誇りを持ち、素晴らしいまちだと感じ、将来それが国内外で活躍する上での自分たちの誇りとなればと思っております。

さて、子どもたちが置かれている環境でございますが、私が申し上げるまでもございませぬが、さまざまな課題が山積している現状を認識しております。現在、経済格差の問題もよく言われておりますが、その中で子どもの貧困の問題等々もあるわけで、市としても財政状況を踏まえながらではありますが、可能な限りの取組をしていきたいと思っておりますし、これまでも取り組んでまいったところで、小児医療費につきましても、今年10月から対象を小学校6年生まで拡大してまいります。

一方で、子どもを巻き込んださまざまな犯罪も発生しております。そうした中

で、学校、家庭、地域が連携して取り組む体制を検討し、組織を立ち上げてまいったところでございます。また、家庭や学校の問題を学校だけに押しつけるのではなく、そうした連携した組織の中で、子どもたちを危険な状況に会わせないように解決に結びつけていきたいと思っております。

また、いじめについても同じで、問題に一早く対応することが大事だろうと思っております。幸い伊勢原市では大きな事案が発生いたしておりません。これも委員の皆様をはじめ市民の皆様方の御尽力の賜物であると思っております。

そうした中で、今年度は防犯灯全てをLEDに変えてまいります。高照度の防犯灯になりますので、犯罪抑止につながっていくだろうと期待をいたしております。また、防犯カメラの設置も警察と連携しながら順次危険な場所や過去において犯罪が発生してきた場所等に継続して設置してまいりたいと思っております。

いずれにしても、この伊勢原が若い人に選ばれるまち「住んでみたい」と言っていただけるようなまちづくりを今後も目指してまいりたいと考えているところでございます。

より良い子育て環境や教育環境の整備については、これまでも一番力を入れてきたつもりでもあります。お陰を持ちまして学校の校舎の改修等も予定の計画年度を大幅に前倒して実施をしてきました。今また、日本遺産という大きな勲章をいただきましたので、これらを誇りとして、教育環境の整備とともに、そうした歴史と文化、それらを活用した伝統あるまちをつくってまいりたいと思っております。今後も皆様方の御意見を十分伺いながら進めてまいりたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

【谷亀教育部長】

ありがとうございました。

続きまして、渡辺委員長、よろしくお願いいたします。

【渡辺委員長】

改めましてこんにちは。高山市長には伊勢原市の教育の発展に深い御理解のもとで御支援をいただいております。教育委員一同、感謝を申し上げます。誠にありがとうございます。

先ほども市長のお話の中にありましたとおり、昨年、教育委員会制度の改革があり、総合教育会議が設置され、今回で3回目の会議になります。また、教育大綱の策定も義務づけられ、「人がつながり 未来を拓く、学びあうまち伊勢原」を教育理念として謳っている教育振興基本計画の内容をしっかりと推進していこうという形で伊勢原市の教育大綱が策定されました。本年度も各学校や教育委員会事務局で職員の入れ替わりがございましたが、それぞれの立場で伊勢原市の教育大綱に沿って教育活動が進められております。

さて、先ほど来話がございますが、4月に伊勢原市にとって待望の日本遺産への認定の知らせが届き喜びをかみしめました。6月には日本遺産協議会も発足し、いよいよこれからは伊勢原市の文化財を軸にした、国内はもとより、国外をも視野に入れた活動になろうかと思えます。子どもたちを含めた市民への日本遺産の周知、理解を図るとともに、文化財の見学やさまざまな活動を通して、伊勢原市

の誇りとなるように努力をしていけたらと思っております。

また、図書館や子ども科学館においてもそれぞれで取組が進んでおります。特に、4月、5月の大型連休の頃には、さまざまなイベントが実施され、例年以上に多くの市民が訪れました。

それから5月のチャレンジデーでは、昨年を上回る53%の市民が参加され、数字の上で目標を達成して金メダルをいただいております。当日、総合運動公園では、すこやかリズム体操の生みの親の長野先生においでいただいて、開会式セレモニーを行ったり、市内の各所でさまざまな運動への取組が行われました。

7月3日には、市民総合体育大会の開会式も行われ、各種目が行われている状況でございます。また、各公民館では、市民のさまざまな文化活動が行われています。6月にいせはら市展が開催され、伊勢原市民の絵画や彫刻、書道、写真や陶芸などの市民の力作も展示されて、かなりの数の市民の方が中央公民館に訪れていただきました。

そして学校教育についてですが、高山市長のもとでさまざまな財政上の工夫、処理をしていただき、各小中学校の施設の改修工事が計画を前倒しして行われ、計画が大幅に進んでおりますことに感謝申し上げます。ただ、施設や設備は年数を経ますと老朽化するため、今後も修理を要するものが出てくるだろうとは思いますが、今後とも必要度を見きわめながら対応していただければと思います。

各小中学校の教育は、落ちついた環境のもとで、子どもたちに生きる力、いわゆる知・徳・体を育むことです。学校では、先生が各授業をしっかりと行うとともに、行事や諸活動で保護者や地域の方々の御協力を得ながら取り組んでいるところです。しかしながら、本日のテーマにもありますように、支援や相談を必要とする子どもや保護者の方が増加しているという現状もございますので、この後、有意義な協議が行われればと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。以上でございます。

【谷亀教育部長】

ありがとうございました。

それでは議題に入りたいと思います。議題の進行は高山市長にお願いしたいと思います。市長、よろしく願いいたします。

3 協議事項

——— 協議事項（1）子どもを育む環境づくりについて ———

【高山市長】

本日は2つのテーマを設けております。まず1つめのテーマですが、子どもを育む環境づくりということで、いろいろ御意見を賜ればと思っております。

人口減少、これはもうありとあらゆるところで言われておりますので、皆さんもご存じのとおり課題ですが、2、3日前の新聞でも、伊勢原は2060年に

は8万人台になるという推計が出ておりました。

そうした中で、今年の3月に「伊勢原市まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定いたしました。その柱の1つが、若い世代の結婚、妊娠、出産、そうした子育ての支援を掲げ、安心して子育てできる環境づくりに努めますというものでございます。これからは、妊娠・出産から子育て、学校教育、家庭教育、あるいは家庭の経済的支援や就労支援まで、それぞれの分野が連携を図りながら、一体的に支援していかなければならないと思っております。

そうした中、私どもは、これまでに健康づくりや観光振興、新たな土地利用という分野では、連携・連動推進チームをつくって対応してまいりました。今年度からは新たに子育て環境づくりのチームを立ち上げ、妊娠・出産から切れ目のない子育て支援、子ども支援の充実に努めているところでございます。特に、保護者の皆さんにとっては、子育て部局と学校教育、社会教育がそれぞれ切れ目なく一体となった支援を必要とされていますので、より一層、市長部局と教育委員会が連携を図りながら、この子育て環境づくりの連携・連動推進チームを中心に取組んでまいります。

この他に、学齢期の子どもの問題として、いじめ、非行、不登校といった問題がございます。これらの問題は、子どもや家庭が抱えるさまざまな課題や、経済格差の広がりに伴う子どもの教育格差等、子どもを取り巻く環境によることも少なくございません。これらの問題に対しまして、学校の先生もこれまで一所懸命やっておられますが、学校現場だけで解決を図ることには限界がございます。本市では、そうした子どもや家庭の抱える問題に対しまして、平成25年度から国のモデル事業として、福祉の専門家でありますソーシャルワーカーや地域の人材を活用して取り組んできたところでございます。また、モデル事業終了後の平成27年度からは市の単独事業として継続して実施し、本年度からはさらに、ソーシャルワーカーの配置日数を倍に増やして取り組んでいるところでもございます。

こうした子どもを取り巻く環境やさまざまな課題に対しまして、今後どのように対応していくべきなのか、学校、家庭、地域、行政がそれぞれどのように関わり、取り組んでいくのか、そして行政としてどのような支援が必要なのか、是非、皆様方のお考えをお聞かせいただければと思っております。

先ほども申し上げましたが、大きな事案は発生していないわけではありますが、いつ、どのような形で発生するかわからないというのが今の現状だろうと思えます。忌憚のない御意見をお伺いできればと思えますので、どうぞよろしくお願いいたします。

【永井教育委員】

では私から。時代の趨勢と言ってはいけないのかもしれませんが、核家族化や多様な就労環境、地域の希薄化はもとより、晩婚化あるいは少子化等、子どもを取り巻く環境というのは一層厳しい状況になっていると、私どもも痛感しております。今後の課題としては、学習支援や教育費負担、あるいは貧困対策などについても、関係部局や福祉分野との連携が不可欠であると感じております。

最近、保育施設を迷惑施設と感じる大人がいるというのも、報道等で見聞きするようになりました。私たち大人は、子どもは地域の宝物ということを再認識しなければいけないと思います。そういった意味で、学校は地域の核であり、一方で地域が学校を支えているという意識を醸成すべきではないかと思っています。

いじめ、非行、不登校等、さまざまな課題を抱える児童・生徒に対しては、スクールカウンセラーやソーシャルワーカーを配置することにより、教職員を支援するとともに、子どもたちの心に寄り添いながら、個別に対応することで成果を上げる方策は重要です。課題を抱える子どもの親へのケアも必要な時代となってきたため、より多様化した課題に対応するための専門員やサポーターが必要になってくるとおられます。さらに、地域社会と協力・協働するための仕組みづくりについても検討が必要になってくるとおられます。例えば、小中学校には学校評議員制度というのがありますが、さらに発展した形、実践的・実動的なものにしていくために、メンバー構成も含めて、組織再編もあり得ることなのかなと感じています。

中学校では、職業体験学習が行われていますので、今後も地域の協力を得ながらキャリア教育を進め、郷土への理解、本人の自立、就学意識を高め、ひいては循環型社会を生み出すものにして欲しいと思います。以上でございます。

【高山市長】

他にいかがでしょうか。

【重田教育委員】

いじめや非行、不登校といった問題に対しては、支援、また、その支援の在り方について、市がさまざまな方向から、その解決に取り組んでいくべきだと思いますので、学校、家庭、地域、そして行政の連携をモットーとした取り組み方については、とても賛成でございます。

問題を抱えた子どもたちは、家庭環境等による格差をはじめ、先天的あるいは何らかの後天的な要因により、自分の意思とは関係なく疎外されたり、いじめられたりしています。特に、家庭的・経済的要因の場合には、非行や不登校に陥りやすいかと思えます。そこで考えるのは、単に成績のみで評価するのではなく、一人ひとりの個性や得意とするもの、または将来につながる何かを見出してあげることが大変必要だと思っております。

また、幾つかの将来の夢を掲げて、それについてのディスカッションを日ごろから子どもたちにさせるということも大変大事だと思っております。私が携わっております美術の世界ひとつをとりましても、奥が大変深いと思えます。それは美術の世界だけではなく、いろいろな職業にとっても同じであり、どんな世界でもやはり奥が深いと思えますので、目標を見つける手伝いをし、自分が何に向いているかを見出し、その方向性を伸ばしてあげるといった姿勢が重要だと思えます。

昨今、共働きの世帯が多く、親も自分の仕事のことで手一杯で、子どもの成長過程において小さな変化に気づいていなかったりすることに大変問題があると思えます。親として、非常にその辺は気をつけているとは思っていても、子どもにとってまだまだ足りないかもしれません。親は、どんなに忙しくても子どもを見

守って、小さな変化にも気づく義務があると思います。また、理由もなく非行に走るということはないと思いますので、子どもたちの心の闇、心の悩みを気軽に相談できる環境が必要だと思います。これはいじめに遭う子にとっても同じで、1人で悩まず一緒に悩む、親身になって一緒に考えてくれるという環境を多くつくることが大変大事だと思います。その意味で、今、市長がおっしゃいましたソーシャルワーカーによる支援は、非常に大事なことだと思いますし、地域の人々の協力で、多くの子どもが少しでも幸せになれるように願っております。

【高山市長】

ありがとうございます。他にどうでしょう。皆さんの意見を一通りお伺いしたいと思います。

【渡辺委員長】

子どもを育む教育環境づくりという話の中で、私も長い間、教育現場でいろいろな形で子どものいじめや不登校等、悩んできた経験がございます。そのような中で理想を申しますと、子育てに関して一番大事な部分は、やはり家庭の教育力の充実ということが基本であろうと思います。そのためには、各家庭がいろいろな支援も含めながら経済的に安定していること。それから、毎日というわけには中々いきませんが、仕事が終わってから親が子どもと語らせるような時間が確保されていること。そういったことで、各家庭で保護者が子どもとしっかりとふれあい、適切な家庭教育を目指していくことがまずは根本にあるかと思っておりますので、そういったことのさまざまな支援をしていくのが良いのかなと思っております。

学校現場でも先生方は文部科学省がつくれます指針や、教員の先生方の研究会や研修会で得た知識等で、さまざまな心理学的な対応方法も取り入れながら指導をしているのが現状だと思います。また、行政においても、学校教育や社会教育のみならず、保健福祉の分野も含めた中での支援の在り方、さらには子どもを継続的に育てていく観点から子ども部を誕生させた経過もございます。現状では、学校も教育行政もそれぞれの立場、分野で一所懸命対応して先生や職員が頑張っていると思いますが、それに加えて教育機関や行政機関が指導効果を高めるため、さらなる連携を図ることが必要だと思います。

ただ、今は昔と違って悩みを持つ子どもや御家庭が増えています。例えば市役所の相談窓口のセクションに5人の職員がいて、そこで市内の児童生徒に対応するわけですが、その中に1つ2つ非常に時間がかかる事案が必ず入ってきます。それは学校でも同じで、子どもや保護者のさまざまな悩みや相談が入ってきますが、学校はご存じのとおり個を大事にするといいいながらも40人を基本とした集団指導を行っていますので、複雑で難しい問題には対応し切れないのが現状です。

そうしたことから、先ほどから話に出ておりますが、学校にはスクールカウンセラーという相談窓口もありますが、さらに、複雑な問題を解決するために関係機関との連携を重視したスクールソーシャルワーカー、いわゆるSSWが大事だということです。このSSWを充実させることによって難しい問題に対応してもらうことで、教員は40人の子どもの他の面に、また市の職員も他の面に目を向けることができると思います。

【高山市長】

ありがとうございました。
菅原委員、いかがでしょうか。

【菅原委員】

乳幼児期においても学齢期においても、家庭環境によって子どもが不利になることがないように、行政や地域がサポートしていく必要があると思います。

まず、学齢期前の人生のスタートラインに、どの子どもも平等につくことができるように、できるだけ早い段階で質の高い教育を保障することが必要であると思います。就学前教育というのは、人生において非常に重要であり、将来の雇用、生活保護受給、逮捕率等にも影響を与えます。つまり個人だけではなく、社会全体にとっても大きな影響を及ぼすという研究結果があります。その意味で、子育てサポーターの養成・活用や子育て広場の開設、虐待予防等の子育てに関する講座の実施といった伊勢原市の取組は大変有意義であり、さらに拡充していただきたいと思います。

また、保育園機能をさらに充実させて、お母さんの就労支援だけではなく、就労いかんにかかわらず、お母さんに気持ちのゆとりを持っていただいたり、あるいはロールモデルを示すことのできる側面を充実させていただければと思います。

次いで学齢期においても、やはり家庭環境の格差が学力格差につながっているという傾向は否めないと思います。その解消のため年に一度、全国学力・学習状況調査が行われておりますので、その結果を精査し、家庭環境と学力の相関関係が確認された場合は、そのような子どもが多くいる学校に対して設備の充実や職員増による少人数学級等、優先的に資源を投入できると良いと思います。

また、ゆとり教育によって週休2日制が導入されたわけですが、それ以降、土曜日の使い方によって各家庭での学習時間や文化活動等の格差が生まれてしまうリスクが生じてしまったと思いますので、各学校を拠点として、専門家、地域にお住まいの方、学生等をメンバーとするボランティアによる地域支援本部のようなものを設置し、困っている家庭に限らず、子育てをする全ての家庭、子どもを対象とする土曜教室を運営してもらってはどうかと思います。学校の先生が土曜日に平日と同じような授業をするのではなくて、一人ひとりの子どものニーズに合わせ、ある子には学習、ある子にはスポーツ、レクリエーション等、居場所や人間関係づくりの機会が地域の方々によって提供できるといいなと思います。地域が主体となることで、例えば学校の校長先生が代わっても継続的に子どもの成長を見守ることができると思います。場所は学校だけではなく、児童館等を利用していいと思います。この土曜教室の場において、家庭の事情によって塾へ行くことのできない中3の受験生に対して学習指導を行うこともできるのではないかと思います。

地域全体で子育てをするという点では、先ほども話題に出ました、中学で行われている職場体験の回数や日数を増やしたり、また、保育園での保育を全ての中学生に体験してもらおうといったような活動をすることで、将来の安定した就労や

子育てへの一助になればいいなと考えます。以上です。

【高山市長】

ありがとうございました。

それぞれ委員さんから御意見を伺いましたが、共通しているのは、やはり地域で支援できる体制をつくっていくことや、それぞれの分野がもっと連携をしていくこと、さらには情報の共有化や核家族に対する問題等々があるということだと思います。先ほど冒頭の挨拶の中で申し上げましたが、地域で何か支援ができる方策はないのだろうかということ考えてきたわけですが、平成25年度に文部科学省の家庭支援のモデル事業がありましたので、それを活用して取り組んできた経過がございます。当初は国から3年間の支援を見込んでおりましたが、国の事業が途中で廃止され、国からの支援は2年で終わってしまいました。しかしながら伊勢原市がそこで終わりにするわけにはいきませんので、市単独事業として継続して取り組んでいる次第でございます。伊勢原の高齢化率は25%になろうとしておりますが、地域には本当に素晴らしい人材が大勢おられると思っております。その豊富な人材、経験豊かな方々に力をお貸しいただいて、地域の子どもたちだけではなくて、障害をお持ちの方、おひとり暮らしの高齢者、あるいは老夫婦でお住まいの方々等々、地域が支えるような仕組みが何かできないだろうかということで、取り組んできたところでもあります。

しかしながら、中々難しさもございます。その難しさの大きな点として、事件に発展したときに、そういった仕組みの中で、誰がどう処理をするのだろうか当初から思っておりましたので、警察のOBの方も仕組みに加え、相談をしながら対応をしていこうという体制をとりましたが、今後はさらに、そうした人材と地域の連携が必要だろろうと思っております。

先ほど来話がでておりますソーシャルワーカーをもっと増やしたいといった要望もあるわけですが、財政状況とも絡んでまいりますので、できるだけ努力はしてまいります。地域でのもっと上手い方法と申しますか、いろいろな形ができないかなと思っておりますので、委員の皆様何かいいお考えがあったら教えていただければと思います。

一方で、学校の先生は一所懸命努力されていることは承知していますが、いろいろな事案の報告が上がってまいる中で、やはりいろいろ家庭内での課題があるのだろうかと思っております。中には複雑で難しい問題でもありますので、一概にこれが良いという解決策は恐らくないのらろうと思っております。今日の毎日新聞に横浜高校の有名な渡辺監督の話が掲載されていましたが、その中で、監督になった時には自分も若かったし、がむしゃらに強くなろうと一所懸命に教え、鉄拳制裁もやってきたと。しかしながら、やはり野球だけではだめで、社会に出て通用する人間を育てるには、幅広い中での指導をしなければいけないと思、それからはコミュニケーションを大切にしてきたと記事にはありました。つまり社会環境の変化にあわせて指導者も変わっていくものだと思いたしました。

【鈴木教育長】

よろしいでしょうか。地域連携について御意見をいただきましたので、お話を

させていただければと思います。

地域連携は昔からの課題でございまして、今は法律に学校運営協議会の規定がありますが、伊勢原では先駆的に地域との連携を図る取組を行ってきており、学校運営協議会に変わるものとして地域連絡協議会を各学校で組織しています。その市内全体の組織が教育センターで運営をしています地域教育機関等連絡協議会になります。それからもう一つが、学校警察連絡協議会です。この協議会は、高等学校まで含めた会議で、青少年の非行防止やいろいろな安全部分で非常に役立っている組織であると考えております。

いろいろとご意見をいただきましたが、子どもの教育は先生方が自信を持ってできるのですが、家庭での子育てやしつけについては、社会教育の領域でございまして、この家庭教育をどうするかが、これからの社会教育の時代的な大きな課題になりつつあるのかなと考えております。先ほど話がありました家庭教育のモデル事業の中でも、親の子どもに対する接し方を学ぶ内容のプログラムも取り入れましたが、これも新しい社会教育の発展形態の1つかなと考えております。

ただ、そうはいいまして、やはり地域が持っている教育力をどう全体的に向上させるか。これは仕組み的なこともあります。文化の問題がありますので、粘り強く取り組んでいきたいということと、やはり常に議論を深めていきたいということを考えているところです。

また、市長の理解を得た中で、市内の「子育て環境づくり」連携・連動推進チームを作ってくださいましたが、問題は出生から最低限成人まで切れ目がない支援をするということです。特に小学校に入る前が重要で、しっかりと支援をしていかなければなりません。今、小1プロブレムなどの問題もありますので、小学校ではベテランの先生を1年生に配置しているような状況ですので、そういった実態にどう取り組んでいくかということで、切れ目のないさまざまな仕組みについて、連携・連動推進チームの中で提案をしていきたいと考えております。以上です。

【高山市長】

他に何かございますか。

【永井委員】

私も今年50歳になりましたが、知り合いのお婆さんが「40、50は鼻たれ小僧。60、70は働き盛り。80、90は知恵盛り」というようなことを言っていたのですが、地域において、親戚でもない人にそういうことを教えてもらえる社会というのは、本当に大事なのかなと思うのですが、やはりそのような今紹介した言葉自体も生涯学習にも社会教育にもなり得ますし、あるいは年配の人にとっては健康社会の持続ということになると思いますので、そういう社会がつくられるよう我々大人が意識を持ってやっていくのが一番重要なのかなと思っております。

【高山市長】

教育はやはり基本が一番大事かなと思います。私も生意気ながら市長になってから「伊勢原に愛着を持つように」「伊勢原を愛するように」、それと「挨拶を

してください」と。ただ、今の若い人は何で挨拶ができないのだろうと思ったら、ある人が言うには、今の若い職員が育ったときには、家へ帰っても誰もいないから「ただいま」と言う習慣がないのだと。「行ってきます」の際も両親がいる家庭は少ないのだと。そういった環境で子どもが育ってきているから挨拶する習慣はあまりないと言われたときには、私もどきっとしました。ただ、そういった教育は家庭だと思うのですが、そういうことは地域でもしっかりと教えていかなければいけないと感じたところでございます。

渡辺委員長、話は変わりますが、児童生徒のスマートフォンや携帯の今の環境といますか、取組の様子はどうでしょうか。

【渡辺委員長】

子どもたちが顔を見合わせないで情報交換し、その結果、いろいろなトラブルなどがより深刻化しているといった状況は、もう何年も続いています。この問題に対してどう規制していくかなど、テレビ等でも報道されているのですが、子ども自身が心の中で「そうしようかな」と思うような状況は、地道につくっていくしかないなと考えます。

この問題に対し、伊勢原では数年前から生徒会を中心に、市内4中学で子どもたち自身が使い方の決め事をつくりました。子どもが自分の部屋に入ってしまうと、大人からは見えない世界なわけですから、大人がいくら規制しても中学生にもなるとそれは規制にならないです。それ故、子どもたちの自発的な意思を尊重しながら、自分で自分の身を守る子どもの数を増やしていくしかないと思います。そういったことは、自分たちの所属する学校、組織を子どもたち自身が大事にするとか、大きな意味で言えば伊勢原のまちを大事にするとか愛するといったことを醸成していくものと考えます。その一方で、自分たちで決めたことは自分たちで守っていくといったことが大事なのかなと思います。

【鈴木教育長】

せっかく伊勢原の中学校でそういった取組を行っていますので、中地区管内にも広げていこうということで、中教育事務所にお願いしているところです。子どもたちが自分たちで使い方を決めていかないと中々難しさがありますので、効果には時間がかかるとは思いますが、そういう取組を行っているということです。

【高山市長】

今のことについて、どうでしょうか。

2年位前だったと思いますが、あるレストランへ行って食事をしたのですが、次の日に「某市長がこんなところで飲食している」とツイッターで投稿されてしまったわけですが、「ああ、これが今の時代か」と思い、これを当たり前と捉えるのか。そうは言っても子どもたちは常にそういうところでさらされているわけですから、常にいじめと背中合わせというか、そういう環境の中で育っていかなければならない状況だということです。

いろいろ御意見をいただきましたが、子どもたちを取り囲む環境というのは、本当に大変だなと思っていますし、一つ間違えれば大きな事件にも発展をしかねないというのが今の状況だろうと思っています。

いずれにしても、私が思うには、地域でお互いに情報を共有して支え合う仕組みを是非いい形でつくればといいなと思っております。それには、伊勢原には人の利といいますか、優秀な方々が大勢おいでになりますので、そういう経験豊富な知識を持った方々のお力を是非お借りして、子どもからお年寄りまでを見守るようなことができればと思っています。今後もいい御提案がありましたら、よろしくお願ひしたいと思っております。

——協議事項（２）スポーツ・運動を通した健康・体力づくりについて——

【高山市長】

では次のテーマがございます。スポーツ・運動を通した健康・体力づくりでございます。これは、ご案内のように、伊勢原は、東海大学附属病院、伊勢原協同病院をはじめといたしまして、私どもは恵まれた医療環境の中にいるわけですが、社会全体では高齢社会の進展に伴い、増え続ける医療費の問題が課題となっております。これからの高齢社会の進展を踏まえまして、市民一人ひとりが健康増進に努め、病気にならないことが最も大事ですので、市内の連携・連動推進チームの1つに「健康づくり」のチームを設けているわけであります。自主的な健康づくりを継続して行えるような支援を行いながら、健康寿命、そして平均寿命の延伸を目指していきたいと思っております。

学校では、知・徳・体、これは昔からよく言われておりますが、そのバランスのとれた生きる力を育むことが教育の目的の1つとして掲げられ、たくましく生きるための健康・体力を養うことも必要であるとされています。また、子どものころから運動の楽しさや習慣を身につけることは、大人になってからの継続した運動習慣にも結びつくものと考えます。

調査によりますと、神奈川県の子どもの運動能力は全国的にも低く、伊勢原市でも同じような状況だということです。私も市長に就任したときに、昭和61年の健康・文化都市宣言の理念のもとで、誰もが、いつでも、どこでも、気軽にスポーツや運動ができる環境づくりに努めていきたいということで努力をいたしてまいりました。

具体的には、市役所の職員が土日を使って市の史跡・名勝コースを自分たちで歩いてつくり上げてくれましたウォーキングガイド、あるいは皆様方にも大変ご協力いただきました住民総参加型スポーツイベント・チャレンジデーへの参加、また、伊勢原のいいものをもう一度復活させようと、長野信一先生に昔作っていただきました「すこやかリズム体操」の再普及など、市民の健康増進につなげていこうということで取り組んでいるところでございます。今年度は新たに、特定健診などにより生活習慣病の予防が必要な方、またスポーツや運動の習慣がない人を対象に、運動などへの取組に対して、特産品などと交換ができます「健康ポイント」を活用したスポーツや運動の普及・啓発活動を行ってまいります。

また、特に子どもたちには、学校や家庭でこれまで以上に大山に登って欲しい

など思っております。私の昔のことを言うと笑われてしまいますが、昔は行くところがなかったので、夏休みになると3回位は家から大山の頂上まで行ったわけですが、今はなかなかそういうことがないような状況であります。是非、日本遺産にも認定をされたことでもありますので、伊勢原のそうした歴史・文化も肌に触れながら体力増進につなげていっていただきたいと思っております。

こうしたさまざまな仕掛けを考えておりますが、まだまだ道半ばでございます。今後、スポーツや運動の習慣化、そして子どもたちにはその楽しさを伝えていきたいと考えておりますので、教育委員の皆様方にも、是非御協力をいただき、またお考えもお聞かせいただければと思いますので、よろしくお願い申し上げます。

また、先ほど冒頭申し上げましたように、市民一人ひとりがまず健康、そして地域のために、家族のために、そして市のために御活躍をいただけることが一番だろうと思っております。特に働き盛りの方は忙しいとは思いますが、自分の体が今どういう状況なのかということは把握していただければと思います。

子どもたちに対しましては、是非いろいろ皆さんの目でお感じになっていることがあろうかと思っておりますので、お聞かせいただければと思います。

【渡辺委員長】

スポーツと運動を通した健康づくりということで、これまでも教育委員会議の中でいろいろな報告をいただけてきました。そのような中で私が考えているというか、思っていることは、伊勢原市がこれまで健康・文化都市を標榜してきた大きな目的は、市民が健康で体力をできるだけ維持・増進しながら日々の生活をより良く過ごせるような状態になることを目指すことだと思います。

そういった考え方で何かいろいろな取組を実施する中で、イベント的なものと日常的なものとの両方があることが大事ではないかという気がします。まず、大事なのは、スポーツ・運動という概念や言葉が、一般の市民の方にどのように受けとめられているかを再認識する必要があると思います。同じ伊勢原市民でも年齢も異なりますし、生活の仕方もみんな異なるわけです。学齢期の子どももいれば、会社や職場で仕事をする人、それから家庭で家事をする人、高齢者がいられるとか、仕事でもデスクワークの人、農作業をする人、技能的なことをいつも職場でしている人、体を動かしている人等々、いろいろな方がいられるわけで、私も昔はスポーツ・運動をやっていたのですが、今はそれ以来やる機会はありません。そういう中で、いつも頭の中で思うのは、スポーツや運動は良いことだけれど、中々できる時間がない。このような思いは私だけではなく、市民の方の多くが思っているのではないかと思います。

このような現状の中で、より多くの伊勢原の人たちが健康や体力を保持・増進していくという意識をどう高めるかというところなのですが、中学校の体育の先生に体力とは何かということを知りました。するとやはり体力というのは、筋力だとか持久力だとか瞬発力、それから俊敏性とか身体持久力とか、あと幾つかございましたが、要するにそういったものを総称して体力と言うのだそうです。そう考えると、スポーツとか運動というものは、それぞれのもので必ずしも種目によっては体力増強につながっていないものもあるかもしれないということも、そ

の先生はおっしゃっていました。スポーツや運動というのは本人の趣味ですが、結果として体力がつくということだと思います。要するに特別なスポーツや運動だけで体力が培われるものではなく、人々が日常の家庭生活の中で、家事をしたり会社や職場での生産活動で体を動かしていること自体が健康や体力づくりにつながっている側面がかなり多いと思いますので、そういったことを正當に認識したり評価することが大切で、そうした認識を広めていくことが市民の方の自信につながるのではないかと考えます。こういった考え方は、教育で言えば、いわゆる褒めて育てる、褒めて伸ばすという考え方で市民の方にアピールしていく必要があるのかなと思います。職場や家庭で体を動かす習慣を付けることが大事で、身近な例ですとエレベーターに乗らずに階段を使いましょうといった取組です。そうしたことを積極的に進めていくことは、スポーツをやりたいとか、運動をしましょうといったことの重要性を力説するよりも大事な事なのかなと考えております。チャレンジデーへの市民参加率が伊勢原市の53%に対して、大牟田市は68%ですが、この差は、今述べてきた認識の違いだろうと私は思っています。また一方で、スポーツ課の方では、スポーツをしましょう、運動をしましょうという呼びかけをしていくことがより大事なのかなと思います。

【高山市長】

ありがとうございます。

子どもの体力の差についてですが、体育の授業時間は基本的に決まっているので、通学の距離とかが関係するのでしょうか。

【鈴木教育長】

小学生の場合は、野球とかのスポーツ少年団に入っているかどうかで随分差が出てくるというのはデータの的にもございます。いずれにしても子どもの置かれている環境によります。

【渡辺委員長】

学校の体力テストの結果は、2～3年先を見て判断しないと分からないと思います。ボールを投げる際に、いきなり投げた結果と、練習してから本番で投げるのとは全然結果が違ってきますので、伊勢原の子どもは体力がすごく良いとは言いませんが、もう少し時間をおいて見ていく必要があるのかなと思います。

【鈴木教育長】

各学校で楽しく運動に取り組める工夫を意識して行っているとは思いますが、運動にゲーム性とか競うような要素が入ってくると結果も上向いてくると思います。

【高山市長】

東海大学と連携した年間を通した講座は、大変人気がありますので、そうしたところで指導者研修を行ってもらうとかはできないのでしょうか。

【鈴木教育長】

それは大いに検討する価値はあると思います。

【高山市長】

他にご意見はございますか。

【重田委員】

渡辺委員長がおっしゃったことは、すごくごもつともで、前々からお聞きしていたので、私も同感です。また、運動といっても短距離型の人、長距離型の人、あるいは体操だとか、球技だとか、水泳だとか、いろいろある中でどれか1つでも得意とするものを見つけてあげるといふ環境も大事だなと思います。とにかく一所懸命やって流した汗はとても気持ちのいいものであって、大変な思い、苦痛な思いをして、それで勝ち得たものというのには、やはり社会に出ても、どんな挫折を味わっても立ち直りが早いのではないかなと思っておりますので、そんなに無理して運動させることはないとは思いますが、やはりそういうスポーツの部分は大事なかなと思ってます。だから、あまり無理してやらなくてもいいんだというところと、無理してでもやったほうが良いというところのジレンマというか、どっちがいいのかなというところは常に思っておりますが、やはり部活で汗を流して、大変な思いをして頑張ったということは、それはそれで社会人になったときに大変貴重なものであり、体力づくりにもなります。誰でも全てできるわけではなく好き嫌いがありますので、嫌いな子でも何か一つでも好きになれるような工夫というか、そういうものを見つけてあげたいですね。

【永井委員】

先ほどから市長からお話がありますように、健康・文化都市宣言ということで、数えましたらちょうど30年ということですので、ちょうどいい節目ですので、これをさらにもう一度見つめ直して、発展させていく必要があるのかなと感じました。

特に、伊勢原の特色ある地域の魅力を生かしていくことが重要だと思っております。例えば、魅力の最たるものはやはり大山だと思っておりますので、市長のお考えにもございましたが、市外の人も大事ですが、やはり小中学校を含め市民が大山登山をすることで運動の機会を持てればいいのかと思っております。体力増進はもちろんのことですが、忍耐力や家族・仲間意識を高めますし、さらには郷土に対する理解や愛着を育むことも醸成されるのではないかと思います。

また、大山と関連しますが、郷土玩具である大山こまの大会がありますが、これは屋内でやっても屋外でやっても玩具ですから遊びなのでしょうけれど、非常にいい運動になると私は思っております。現在、小学校の大会がありますが、関係の運営団体との協議が必要ですが、行政としても何らかの支援のもとに、さらなる発展が可能なのかなと思っております。

それから、日本遺産の認定に伴いまして、市内を訪れる人たちが増えてくると思いますので経済的な期待もあるかと思っております。観光客には花が一番いいとよく言われますので、小中学生も含めた花づくりのボランティアをコーディネートできる仕組みを作り、道路の植栽等で年間を通して花を育てることができたら、そういったところで大勢の老若男女の交流もできますし、市民の明るい笑顔、健康につながってくるのかなと思っております。

それから、中高年のウォーキングブームは、止まる場所を知らないといった状況でございます。市内の人たちが身近に参加できるような非常にいいマップができたと思っておりますので、さらなるコースの充実に加え、ポイント制の導入等の副

次的な要素を組み入れるということも今の時代では大切なのかなと思いますし、大変おもしろい取組だと思います。その結果が豊かな自然を守ることにもつながりますし、歴史や文化が息づくまちづくりへの理解も深まるのかなと思います。そうなれば一石二鳥、一石三鳥になるとも思います。

【菅原委員】

学齢期の子どもたちに関していいますと、運動の好きな子や得意な子はスポーツ少年団とか運動部に所属してますます運動が上手になり体力がつき、逆に運動が苦手だったり嫌いな子たちとの格差は広がります。そういったスポーツ少年団等に所属できない、あるいは参加したくない子たちにどう運動をさせるかが課題だと思います。一方で、子どもにとっての運動というのは、体力づくりだけではなくて、エネルギーを発散したり、集中力を高めたり、あるいは体幹を鍛えて姿勢を保ったりするためにも習慣化させることはとても大切だと思います。

私も1カ月前のチャレンジデーのときに、すこやかリズム体操をやって非常にリフレッシュしまして、普段使っていないところ、特に斜めの動きというのはすごく気持ちがよく、すぐれものだと思います。例えばすこやかリズム体操を13時台、大体昼休みが終わるあたりの適当な時間帯に、小中学校だけではなくて、例えば市内の放送で全市に向けて流して、近隣の方も小学校で一緒に参加できたり、それぞれの家庭で、家から出られない人は家で参加したりというようなことができる、子どもたちにとっては午後の授業に向けてのリフレッシュであったり、眠気覚ましになるのではないのでしょうか。市民の人たちにとっても、午後もまた頑張ろうとなるそういう時間になるのではないかなと思いました。子どもたちに対しては、一つ目のテーマの中でもお話させていただいた土曜教室のような場で、卓球であるとかウォーキングであるとか、軽い球技等の簡単な運動の機会を作ってあげることでもあるのではないかと思います。運動不足や普段運動をする習慣がない方に体を動かしてもらうことは、市長がおっしゃるように本当に大切なことだと思います。

調査結果で、一番運動不足になりがちであるのが子育て世代の20代、30代、40代の女性ということですが、子どもさんを遊ばせる公園の片隅に、ストレッチができるような簡単な器具を設置して、子どもを遊ばせている間にちょっとしたストレッチができるようになっていけばいいのではないかと思います。私の自宅の近くにも公園があり、そこに雲梯があるのですが、ぎっくり腰になった際に、その雲梯にぶら下がることによって非常に良い効果を得ていますので、ちょっとしたぶら下がり器だけでもいいので、公園の片隅にあるとお母さんたちのリフレッシュになるのではないかなと思います。

また、高齢者の方々には、積極的に外に出ていただくため、市役所や図書館、文化会館、公民館、総合運動公園等の市内の拠点を廻る巡廻バスがあると、お年寄りの方も気軽に外に出やすくて、運動やさまざまな活動ができるのではないかなと思います。

先ほど話した近所の公園ですが、大山の方からゲートボールをされに来る高齢者の団体がいて、その方々に、文化会館で催しがありますので、文化会館にいら

っしゃいませんかとお誘いしたら、文化会館に行くのは非常に大変であるとの返事でした。一度駅に出てから、またバスに乗りかえないといけないから、ちょっと行きにくいのだというお話をされました。この話は直接スポーツとは関係ありませんが、外に出て体を動かすためにも、拠点を結ぶような交通機関を整えば、健康年齢を上げるということにも効果があるのではないかと考えました。

ウォーキングガイドですが、これは本当に名勝の探索という文化活動と、ウォーキングという運動を組み合わせた、伊勢原ならではのすばらしいガイドだと思います。できれば、歌川とか渋田川沿いの平坦な里の地域にサイクリングロードを整備していただいて、ガイドにサイクリングガイドなども付け加えていただくと、さらに充実するのではないかと思います。

【鈴木教育長】

ずっといろいろな取組をやってきておりますので、これからも切れ目なく続けていくことが大切です。その時々で強弱はありますが、市民の関心が一番そこにございますので。今後も連携・連動推進チームがいろいろ提案してくれると思います。

【高山市長】

いろいろご意見をいただきましてありがとうございます。確かに子どもの運動不足、これはもう何としてでも解消していかなければいけないと思います。ただ、私どもが育った年代のことを考えれば、学校から帰れば隣近所に幾らでも友だちがいたのですが、今は中々遊んでくれる友達もいないのだらうと思います。そうした環境の中でどうするのかということは大きな問題かなと思います。

お陰様で、このリオデジャネイロオリンピック・パラリンピックに本市出身の水泳競技の塩浦選手が出場します。母校へ行って激励も受けたようで、大変みんなも期待をしているので、これから東京オリンピック・パラリンピックに向けていろいろスポーツ熱も高まってくるのだらうと思います。

また、先日、日本遺産の認定式に行ったときに、馳文部大臣に、私は神奈川県伊勢原市ですと言ったら「俺はつらい思い出がここにあるよ」と言われました。専修大学のレスリング部だったので随分伊勢原には来ていたようで、そこで今の馳さんの大臣になる基礎がつくられたのかなと思っております。今度は美味しいお豆腐料理を出しますので、いい思い出をつくり伊勢原に来てくださいというお誘いをしてきました。そうした若いときといいますか、学生時代の思い出というのはさまざまな形で残っていくのだらうと思いました。

話は変わりますが、私どもの長年の懸案でありました上満寺のスポーツ広場も整備しました。多目的な利用を考えて整備しましたので、年代を超えて多くの方に使っていただければと思います。本来でしたら近場がいいと思っていますので、昨年度から公園緑地課に対し、地域でどのような公園が求められているのか。そこをもう一度再点検をするように指示は出してあります。ただ、地元で意見を聴くと、今までブランコや滑り台があるので、やはりそれは残して欲しいという要望がどうしてもあるようなので、近い所に2つの公園があれば、一つは従来型にし、もう一つは新たな形のものにするとか、その辺の地元の意見をお聞かせいた

だきながら、公園づくりも取り組んでいければと思っています。

いろいろ課題はありますが、子どもの体力向上に向けて努力してまいりたいと思っています。

最後になりますが、最初のテーマでも結構です、これは言うておかなければということがあれば、この機会に御発言いただければと思いますが、いかがでしょうか。

【永井委員】

今、市長からオリンピックの話が出ましたので、それに関連してですが、来月からいよいよオリンピック・パラリンピックが始まり、4年後には東京オリンピック・パラリンピックも開催されるということで、その機会を捉えて何ができるのかということも伊勢原市として何か考えておく必要があるのかなと思います。

蛇足でございますが、東京都では、小学生から高校生を対象に学習読本が配布されるそうです。これは新聞に載っていた記事ですが、国際オリンピック委員会には3つの価値があり、あるいは国際パラリンピック委員会にも4つの価値があると。細かなことは今は申し上げませんが、最近、プロスポーツ選手による事件とか、あるいはオリンピック代表級選手による不祥事というのは、本当に信頼を失墜させるものでありますし、子どもたちの憧れとか、夢、希望といったものを損なうものだと考えております。今後、オリンピック・パラリンピックの開催に向けて、スポーツにおける高潔性というか、そういったことを学ぶ場をつくっていくことも必要なのかなと。健康・体力づくりとは異なりますが、そういうことも重要なのかなと感じております。

【高山市長】

他によろしいですか。

どうも、いろいろご意見をいただきましてありがとうございます。

4 閉 会

【谷亀教育部長】

それでは皆様、活発な御意見をいただきましてありがとうございます。これで、用意いたしました日程は全て終了いたしました。

これをもちまして、平成28年度第1回伊勢原市総合教育会議を終了させていただきます。皆様大変お疲れ様でした。ありがとうございます。

午後4時56分 終了